News Release

同志社中学校 Doshisha Junior High School × こころまち つくろう KEIHAN 叡山電車

報道関係者各位

2016年12月16日

素敵な駅をつくる産学協同『八幡前駅プロジェクト』
2016クリスマス・イルミネート・デコレーション点灯式
&駅にて地域住民を招いてのサンタイベントを実施

Merry Christmas

日時　2016年12月20日（火）　15:00～16:00頃

場所　叡山電車「八幡前」駅ホーム

同志社中学校の有志メンバー11名と、叡山電車とのプロジェクトチームでの産学協同！
八幡前駅のクリスマス演出の仕上げと、ツリーイルミネーションの点灯式を、
そして、駅での地域住民（こひつじ保育園 他）にサンタがお菓子を配るイベントを行います。

「八幡前駅プロジェクト」は、2013年に始まった同志社中学校の有志生徒と叡山電車による産学協同の「素敵な駅」をつくる取り組みです。

地下鉄開通後、八幡前駅の通学利用者は中・高全体の約1割ほどまでに激減し、また周辺地域の住民も少子高齢化が進み、過去の活気を失っている八幡前駅。**「町の人にとっても、同志社にとっても大切な八幡前駅を、もう一度素敵な駅にしたい。」**その思いで、これまでに「手すりの塗装」「壁新聞の季刊発行」「クリスマスデコレーション」「駅の全面改装」「マスコットキャラクター ハト駅長の開発」「旧チャペルイスの寄贈」など、数多くの取り組みを行ってきました。

そしてこの2016冬、プロジェクトメンバーも第6期になり、新たな発想で「2016クリスマス・イルミネート・デコレーション」に取り組んでいます！**テーマは『恋のパワースポット』**！！企画としては、**「ハト駅長のサンタ仮装」「クリスマスツリーイルミ」「ハート型イルミのカップル椅子」「電車が来るとクリスマスソングがホームに鳴り響くシステム導入（叡電史上初）」そして、12/20（火）駅にて行う地域住民（こひつじ保育園児 他）を招いての「サンタクロースイベント（お菓子プレゼント）」をラインナップしています。**“寂しい”“暗い”といった駅が抱える課題を、中学生が演出した企画で“賑わい”や“明るさ”に変えたいと願っています。本校生徒のみならず、周辺地域住民の方々や観光客にとっても駅への愛着を持っていただけると期待しています。

報道関係者の皆さまには、PBL（**Problem Based Learning**）やアントレプレナーシップ教育が注目されている今、京都の街に根差した本プロジェクトに是非とも着目していただき、広くご紹介していただけますようお願い申し上げます。

【本件および取材・報道に関するお問合せ】

同志社中学校　入試広報室（担当：古城 090-9042-8921）
TEL：075-781-7253　MAIL：chugaku@js.doshisha.ac.jp

叡山電鉄株式会社　総務部
TEL：075－702－8110

叡電・八幡前駅 美しく

手すり ペンキ塗り替え

通学で使う同志社中生ら

塗装がはげた手すりをペンキで塗り替える生徒（京都市左京区・八幡前駅）

京都市左京区の同志社中の生徒が、通学で使う近くの叡山電鉄八幡前駅の修繕活動に取り組んでいる。85年前の駅開業以来、ほとんど未改修のため同電鉄が学校にも協力を求めた。生徒たちはペンキ塗りなどに励み、駅は徐々に生まれ変わりつつある。

駅の修繕には社会起業家を支援する「アショカ・ジャパン」（東京都）も加わり、生徒とともに修繕方法を検討している。駅舎は1928年の開業からほとんど改修されず、2〜3年の生徒10人が1月から駅の課題を探っている。

14日には生徒とアショカ・ジャパンのメンバー計8人が、明るい印象になるように黄色のペンキで手すりを塗り替えた。大きな時計を設置するなどの改修案を今月下旬に同電鉄に提案し、4月以降の取り組みを相談するという。

鉄道部で3年の寺内高輝君（15）＝伏見区＝らは「八幡前駅はローカル駅のいい雰囲気が漂う。多くの人に使ってもらえるように頑張りたい」と話した。（宇都寿）

叡電・八幡前駅 Xマス色に

同志社中生が装飾

はちまんまえ
たからがいけ
E06
八幡前
HACHIMANMAE
イエスの誕生

クリスマスの飾り付けをする同志社中の生徒ら（京都市左京区・八幡前駅）

京都市左京区の叡山電車八幡前駅で18日、同駅に近い同志社中の生徒5人が、特製の人形などを置き、赤いモールなどを取り付け、クリスマスの装飾をした。

同中の生徒たちが、自分たちの手で明るい駅にしようと、1月に取り組みを始め、手すりの塗り替えなどをしている。

この日は上下線のホームで、手書きの「イエスの誕生」や「クリスマスクイズ」などのポスター6枚を貼った。サンタクロースの帽子をかぶった、紙粘土製の新島襄や八重の像などを並べた。ホームには叡山電車の職員が取りつけた白と青のイルミネーションも点灯されており、クリスマスムードが高まった。

駅を利用する3年の馬詰真実さんは「駅名にちなんでコストを8万円に抑え、温かい駅を目指して取り組んだ。人がたくさん使うようになれば」と話している。（浅井佳穂）

ったが、2006年から
市民の投稿も載せ始め

ニュース

京都新聞社 The Kyoto Shimbun Co.,Ltd.

叡電八幡前駅に旧礼拝堂の長椅子　同志社中・高から

叡山電鉄八幡前駅に設置された、同志社高の旧礼拝堂で使用されていた長椅子（京都市左京区）

京都市左京区の叡山電鉄八幡前駅に23日、同志社高の旧礼拝堂で55年間使われていた長椅子1脚が設置された。同駅に近い同志社中と叡電が共同で企画し、関係者が「駅のシンボルになってほしい」と除幕式を行った。

八幡前駅は同志社中・高の生徒たちが通学に利用しているが、地下鉄国際会館駅の開業後は利用が減っている。2013年から同志社中と叡電が「八幡前駅をすてきな駅にしよう」と、ホームの手すりの塗装やクリスマスの飾り付けなど、活性化に取り組んでいる。

設置された長椅子は木製の4人掛けで、1955（昭和30）年から2010年まで同志社高の旧礼拝堂で使用されていた。

この日は同駅で除幕式が行われ、同志社中・高の木村良己校長や叡電の松下靖社長らが出席。木村校長は「子どもたちの成長の息吹を見守ってきた椅子が、地域の発展につながることを望みたい」とあいさつした。

【2016年06月24日 09時53分】

八幡前駅プロジェクトは、
これまでも記事に取り上げていただきました
（2013年3月19日京都新聞朝刊　宇都寿記者）
（2013年12月19日京都新聞朝刊　浅井佳穂記者）
（2016年1月16日京都新聞朝刊　浅井佳穂記者）
（2016年6月24日京都新聞朝刊　後藤創平記者）

レールの先にひろがる街 ②

生徒の足 にぎわい運ぶ

岩倉の鉄道盛衰
叡山電鉄・地下鉄烏丸線
過去
未来

カラフルなモールや電飾を使い、同志社中生が築約90年の駅を飾り付けていた。京都市左京区岩倉の叡山電鉄鞍馬線にある八幡前駅。駅の梁（はり）は、同志社のスクールカラーの紫色に塗られ、壁は校舎をイメージしたれんがのパネルで覆われている。

同志社と八幡前駅との関わりは1928（昭和3）年の当時の鞍馬電鉄開業以前にまでさかのぼる。市中心部にあった同志社専門学校高等商業部は、学生増に対応するため岩倉への移転を模索していた。

「同志社が本計画を決定すれば、鞍馬電鉄が＝中略＝岩倉線（同志社買収地の東側に沿うて北上する線）にする」。「同志社百年史」にはこんな当時の文書が引用されている。新校地と新駅は不可分だったことがうかがえる。

学制改革で高商が廃止となった後も、同志社高が立地。駅と叡電は生徒の足であり続けた。「畑と田んぼだけ」（同志社百年史）だった付近も戦後、家が立ち並ぶようになる。岩倉に生まれ育った坂田光男さん（72）は「（66年完成の）国立京都国際会館ができたころから家が建ち始めた」と振り返る。

国勢調査によると、65年に7988人だった岩倉地域の人口は、70年には1万2662人に、80年には2万人を突破。八幡前駅の乗客数も、府の統計によると95年度には過去最高の45万人を数えた。

転機は97年にやってきた。市営地下鉄烏丸線の国際会館駅が岩倉地域に開業。京都駅や四条烏丸と直結され、通勤、通学客が地下鉄に流れた。八幡前駅の乗客数は翌年度に18万人にまで落ち込んだ。

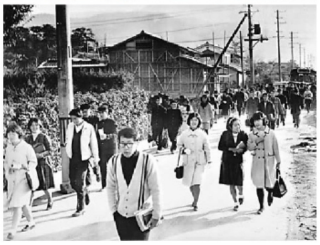
八幡前駅 再生も子どもたちと

学校法人同志社は、地下鉄利用の利便性を当て込み、2006年に小学校を開校。10年には同志社中も移転させた。「岐阜や愛知から新幹線通学する生徒もいます。将来、入試説明会を岡山で開催する構想もある」と同中入試広報室の古城郷さん（34）は語る。

八幡前駅の同志社生の利用は近年、「（中高全体の）1割程度」と古城さん。改修もされず暗い駅というイメージになっていた。

親しめる駅にしようと、2013年春から同志社中と叡山電鉄が取り組みを始めた。さび放題だった手すりは明るい黄色に塗り替え、冬にはモールなどでクリスマス仕様に飾り付けた。今冬も「八幡前駅プロジェクト第5章」が活動している。

今後は、生徒の提案で「ハト駅長」というキャラクターを置く。3年久保舞夏さん（15）は「ハトは近くの三宅八幡宮で神の使いとされている。和歌山電鉄で有名になった、たま駅長のようになれば」と期待する。駅活性化へ新たな歴史を、ゆかりの深い同志社生が一役担おうとしている。



㊤駅を明るくする取り組みに参加し、「ハト駅長」のイラストを駅名表示に貼る同志社中生（京都市左京区岩倉・叡山電鉄八幡前駅）㊦八幡前駅を降り同志社高に登校する生徒たち。駅もにぎわったという（1966年度、同志社高卒業アルバムより）